

ドイツ大規模同窓会 ドイツ×日本「保育研修」 2017.8.26～8.27

第28号 2017年9月11日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢



第1回ドイツ視察ツアー（2002年）

ドイツ環境視察研修『大規模同窓会 × 保育研修』

2002年からはじまったドイツ環境視察ツアーも今年度で15回を迎えました。これまでにドイツ視察ツアーに参加した人が一同に介しての大規模同窓会を行いました。

また、現地通訳としてお世話になっているベルガー有希子さん、田中泰二さんをドイツからお招きして、ミュンヘンの現状の保育について研修会を博多の同会場で開催しました。

新宿せいが子ども園 藤森園長はこれまでに15回のツアーに加え、ドイツでの保育の世界大会等での訪問を足すと、17回程ドイツへ視察に来ています。

その理由の一つに「変化を見るため」と藤森先生は仰っていました。過去のドイツ視察ツアーについての報告書は、[臥竜塾ブログ](#)で、「ドイツ研修」と検索してください。

第4回からのドイツ視察研修についての記事をお読み頂けます。

そして、巻末にはミュンヘンの保育の現状について、ベルガー有希子氏の講演録を掲載しています。

1. バイエルン陶冶保育プラン（BEP）について
2. ミュンヘンの乳幼児施設の現状（数や特徴など）
3. 行政の理念と施策
4. オープン園の増加
5. 自立性を重視した学び



講演には 130 名程が先生方がドイツの実情について耳を傾けました！



特別講演テーマ

●過去のバックナンバー

第25号

築120年古民家『聴福庵』⑤

第26号

GTサミット2017

第27号

築120年古民家『聴福庵』⑥

<http://www.caguya.co.jp/topics/news/p9889/>

研修を終えて思うこと

ドイツ研修に参加させてもらったのは、2013年と2014年。
幸運なことに2年連続で藤森先生にご一緒させて頂き、
ドイツの保育視察をさせて頂きました。

ドイツの保育環境は充実しており、これまでの他のカグヤクルーも
ドイツ視察に参加し、持ち帰った実践は数多くあります。
その一例ですが、サンキューツリー（枯れた木に手紙を飾っている木）、
ときめき写真（ときめいた写真を応接室に飾る）などがあります。

そんな中、私も先生方に混じって、せっかく訪れたドイツの
保育施設の写真を一生懸命撮っていました。

1週間ある研修のうちの4日目ほどでしょうか。

ふと、あちこちに素敵なものに溢れていることに気が付きました。

それは、一緒に参加した先生方の笑顔です。「見てみて、これ面白い、
帰ったらやってみたい！」「早く子どもたちに会いたいな～」

そんな一言を聞いて、私のカメラの後半は先生方ばかり映っています。
楽しそうに、笑顔で、保育を見つめる先生方に、私は先生方から保育の
楽しさや、奥深さをドイツへ行って感じました。

あれから、早いもので3年が経ちました。

そして今、世界に向けて日本の保育を発信していこう！
という新たなプロジェクトも動きはじめています。

世界は広い、知らない世界もいっぱいある！だから、面白い！！

今度行った時は自分の言葉で保育を伝えたい！そう改めて思うのです。

（報告者：株式会社カグヤ 奥山卓矢）



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2 号館 10 階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。

特別講演 「バイエルンの幼児教育政策—自由遊びの重要性を強調—」

BERGER 有希子氏 (ミュンヘン公立幼稚園教諭)

—はじめに—

おはようございます。ベルガー有希子と申します。お懐かしい顔がちらほら見え温かい気持ちになります。今日はドイツのミュンヘンの保育の現状をお伝えできたらと思っています。第1回視察ツアーは15年前になり、ドイツ民族衣装を私が着て、その後ろにいるのが藤森先生。娘はもう25歳になる。ドイツ視察ツアーもかれこれ15年経ち、藤森先生のお陰で長く続き喜んでいます。ドイツにいらした方もいると思いますが、いらっしゃっていない方もいると思うのでまずはミュンヘンについて紹介したいと思います。ミュンヘンはドイツの首都ではなく、バイエルン州というのがありますがその首都です。そこに教育スポーツ局があり、学校や幼児教育を文部科学省が管轄しているようなところに所属して、視察の希望があったときに、私は視察担当ということで案内をするのが公務となっています。お休みを取ることなく皆様を案内ができる。それで私の園には何人か来てもらっていると思うが、実習にも何人か来てもらっている。実習の希望を頂いたら会議に出して許可が出たら何週間か実習も出来ます。その前にドイツ語の勉強をしてもらうこともある。反対にドイツの保育者を日本に2003年に連れてきたこともある。34名程だったと思うが忘れられない記憶で、わがままを言いつぱなしで、スーパーでは何が書いてあるんだということを何度も聞かれた。その時に、せいがの森保育園にドイツの保育者を連れていったら「園児の笑顔がいいですね!」と言っていた。子どもたちが満足しているのかなと思った。それから藤森先生との長い付き合いがはじまった。

今日はこういう写真を持ってきた。どうしてこの写真を選んだかと言うと、ドイツはまず森。森の幼稚園を知っていると思うが、普通の園でも森にお散歩へ行くことはよくある。上下ゴムでできた撥水性のつなぎに見えるが、上着とズボン両方にわかれている。どんなお天気の時でも外遊びをする。私が働いているのがハウス・フェア・キンダー。直訳すると子どもの家。幼稚園でも保育園でもなく、0～6歳までの施設を保育園。3～6までの施設が幼稚園。学童は6～10歳。子どもの家は、これらが組み合わされている時に子どもの家と言う。森での保育だが、森の保育と言うとドイツでどんないいことがあるかなと思われると思う。一番大事なのは危険を取り去るのではなく、子どもが前もって危険を知って防いだり、対処する方法を学ぶことが大事だと言われている。いろいろな先生に聞くと森の保育園のいいところを教えてくれる。「リラックスして楽しめる、枝で工作できる、五感を使える、自然の変化を体で感じられる、グループとして活動する力がつく、お部屋の中で上手に付き合えない子も、外でリラックスする空間だと付き合い方が変わる」という研究もされている。教育局のモットーだが、よき陶冶は乳幼児施設からはじまると言われている。藤森先生の講演に参加している方はご存知だと思うが、陶冶は教育と訳すことがあるが、人格形成を含んだ教育のこと。陶冶は乳幼児施設からはじまり生きている限り続く。ドイツで子どもが大切にされているのを感じるのが公園の多さ。公園がどう使われているかに現れている。私の町の周りで公園の数えたことがあるが半径1キロ以内に8つあった。それぞれ子どもが遊んでいる。公園の多さ、緑の多さで子どもが大切にされていると思う。

なぜ陶冶の大切さを叫ばれるようになったかと言うと、2001年にPISAの学力調査で20何位と結果がふるわなかった。それでショックを受け、ショックを受けた内容が学力が低かったというだけではなくて、それを補完する形でアンケ

ートを子どもにとった。その結果が家庭の裕福さ貧困度によって学力が違くと明確に出た。ほかの国よりも家庭の裕福度が高いほどいい学校に入り、低いほど入っていないと明らかになった。それにドイツの教育局はショックを受けて、そのためにはどうしたらいいのだろう、乳幼児からのテコ入れが必要ではないかと PISA の調査から幼児教育に力を入れるようになった。例えばフンボルトという方がドイツにいるが、フンボルトは「陶冶は世界をあなたの世界が広がる」ということを言っている。ピアジェは「陶冶とは世界との対話である」ということを言っている。陶冶は永遠のテーマとしてあり、ドイツには「生きることと学ぶことは同じである」という考え方で、生きる力は何かと聞かれたら、「何かを実行する力を培うことが本当の陶冶ではないか」と言われている。

—1.バイエルン陶冶保育プラン（B E P）について—

陶冶について身につけるべきは、基本的能力として 2001 年の PISA 結果を受けてバイエルンが制定したものが、バイエルン淘汰プランというものがある。その中で子どもたちが身につけるべき能力として、いくつか紹介する。陶冶で身につける能力として①自己認識（自分のことを知ること）②やる気（モチベーションを身につけること）③知的能力（読み書き）④身体能力、⑤社会性、⑥価値の教育（感性）、⑦責任感、⑧参画（特に言われることが民主的な参画する力）、⑨学習する能力（継続して学習するためにはどうしたらいいかを学ぶというもの、学ぶことを学ぶ）⑩レジリエンス（最近、強調されている。困難があったときに乗り越えていく力）の 10 点がバイエルン陶冶プラン、陶冶によって身につけるべき能力と言われている。2005 年にバイエルン陶冶プランを制定した。基本方針として、子どもの遊びの中の発達支援が基本の中の基本。遊びの中で子どもの能力を引き出す。早期教育を間違っって受け取ってほしくないが、日本で早期教育と言うと早くさせるとか、3 歳からピアノをしないと云われることがあるが、そうではなく、早い時期の教育。早い時期に機会を与えてあげるといこと。教育には語弊があるので間違えないでほしい。陶冶、保育、養護は子どもの発達に見合った形で、成される。フラッシュカードみたいなのを使ってもその時はできても陶冶とは言えない、訓練。

幼児期の教育の重要さが強調される中でも遊びが教育学的基本。陶冶の意味を考えないといけない。ここの発達支援が適切に行われるためには、その子どもをよく観察することが必要と言われている。実習でうちにも実習生が来るがまず何をするかと言うと、まずは観察し続ける。ノートに子どもの様子を書く。子どもの様子を的確に把握することがすごく重要だと位置づけられている。プランの要となるものは子ども。保育内容の論議ではなく、常に保育のプロセス、どういう風に関わっていくか、どこに興味を向いているか、今どうしたらいいかの方が大事だと言っている。遊びと学びコインの表と裏、つまり遊びと学びは分けて考えるのではなく、遊びの中に学びがあって学びの中に遊びがある。子どもがそれに対して興味を抱いて、答えを導き出せるようにすることが大事とされている。この基礎を子どもに与えることができれば、新しい視界が開けるので何とか大きくなれるという考え方。ほかに大事にされていることが保育者一人ひとりの保育観の確認。あなたはどうかとすり合わせて職員が子ども観を持っているように、つまり子どもはやってあげる存在ではなく、自らできる力を秘めているから陶冶プランを持って、引き出して伸ばしてあげるという保育観を確認することがなされている。日案や月案ではなくて、子どもの要望とかにあった提案をしていく。保育者としても自覚して自分で決めて自分で選択する学びが能動的に学ぶ経験が身につく。

陶冶と言う考え方で保育も自由の遊びも重要視している。陶冶プランの中心となる陶冶保育領域、日本では 5 領域があるが、言語領域、数学の領域、科学技術の領域、メディア教育の領域、音楽教育領域の、健康身体表現・スポーツ表現の領域がある。メディア教育では機会を与えてあげるという考え方。家庭の貧富の差が激しいので貧しい子どもたちは

PC・スマホを触ったことがない。園で触って操作することを覚えてもらうために、メディア教育が重要視されている。メディアの選択の仕方。どういうメディアを選択するのかというものも含まれている。日本には、人間関係の領域があるが、ドイツにはないではないと言われるが、人間関係はどの領域にも含まれているという考え方なので基本的身につける中に社会性があるので、陶冶領域には特にない。数学については園で取り入れているのはモンテッソーリの教材。科学技術では小さな科学者、視察に来られた方は知っていると思うが小さな科学者というプログラムがあって、遊びの中で不思議だなと言う感覚を通して、科学に目覚めるということを国を挙げて取り組んでいる。シーメンスなど企業が中間に立ち、小さな科学者協会と園に広めていく活動がされている。

ここからは写真について見せていく。これは小麦粉に赤い粘土を混ぜて遊んでいるところ。保育内容を誰が決めるかと聞かれるが2つのパターンがあって、子どもたちがやりたいと言い出すときもあるし、お集りの後に保育者が今日はこんなことをするよと提案をする。その時に一人の先生が「小麦と粘土を混ぜて遊ぶよ!」と言って、そこで遊びたいという子はその場所で遊ぶ方法がある。先生が誘導する方法、でも強制ではない。子どもが選んでする方法と子どもからこんなことをしたいというパターンがある。この活動についても現役の先生が多いと思うのでわかると思うが、言語能力も使いし大きな塊を作れば数学も入ってくるし、粘土を多めにすれば濃くなるとか薄くなるとか科学のこともかかわってくる。身体表現と言ったが気持ちのいい体験を積み重ねる。五感を鋭くする教育にもなる。これは運動をしているところ。五感や健康、これも同じ。左にあるのは下に板があって体育館によくあるが、それぞれ違った板があって、つるつるだったり、でこぼこだったり、裸足で歩くと五感が発達するものでドイツによくあるもの。これは食育、ベリーを採ったり、かぼちゃスープを作ったもの。クッキング保育もよく提案する。春はカイワレ大根の栽培、夏にはイチゴやベリーを収穫してジャムやスムージーを作る。秋は日本では同じようにされていると思うが、かぼちゃ・りんごを使ってフルーツサラダ、ジャガイモ堀やあぶって食べたりする。冬には焼きりんごやクリスマス時期にはクッキーづくりを行う。これも引き続き食育の写真。ここで見てもらうと右上のところは、ナイフを使っている。ドイツでは小さいころから3歳になる前から2歳くらいから使うこともある。もちろん見ているが、幼稚園は3歳になると普通のナイフで切らせる。一度、子どもとりんごを切っている時、ぐっさり切ってしまった子がいて慌ててしまったことがあったが、園長が「大丈夫くっつく」と言われた。親御さんにどうしようと思ったら、親も「大丈夫、大丈夫くっつくから!」と同じ反応をされほっとしたのを覚えている。保護者も怪我には寛大で子どもは怪我をして育つものと思っている。ゴミは2キロくらい食べてもいいと言うくらいで、怪我や衛生面では寛大。これは、自分を肯定できる気持ちのいい体験を重ねることが大事だと言われている。自分の気持ちがいい体験を重ねることで自己固定感が高まる。気持ちのいい体験を積むことで自己肯定感が高まり、自己肯定感を高めるために気持ちがいい体験をする。自己肯定感が高まることで困難に向かう力も養われる。ドイツでは気持ちよく過ごせるコーナーがたくさんあり、一人になれるコーナー、気持ちよく遊べる空間がある。これはお庭で遊べる工夫。心地よい提供。心地よい経験をする。ここは保育園の例だが、トイレとお風呂と言うかシャワーが一つの部屋になっている。その部屋も保育室として使っているので、シャワー室でボディペインティングをして自分の体も心地いい物、嬉しい楽しいという気持ちいいということを表現していいということを学んでいる。ここにはないが鏡が保育園には多用されていて、鏡の多用は自分と言うものを見つけるので鏡が多用されている。

—2.ミュンヘンの乳幼児施設の現状—（数や特徴など）

具体的に保育施設に紹介する。保育園 0～3 歳児まで公立は 70 施設。日本に比べると少ないと思う。需要はあるような、無いようなので本当に需要がないと両親が作れとうるさく言うが、今のところ声が上がらないので 70 施設で大丈夫かなと思う。その仕組みとして分業制で母親、父親が一日中働いている場合、母親は 5 時間だけ働くということが確立され、減給やパートになるということではなく、短時間勤務と言うことが確立されそういう選択する母親が多いので声が上がらないのだと思う。幼稚園は 3～6 歳までの施設で 90%が通っている。私立は規模が小さいために収容している人数も少ない。子どもの家は 0～6 歳あるいは 0～10 歳、あるいは 3～10 歳まで預かり 100 施設位。新しく建てられている施設はほぼ子どもの家。特徴としては異年齢児保育。ドイツは学校方式を知らない。フレーベルは幼稚園を自分の子どもと親せきの子どもを集めて、自宅を開放して始めたので異年齢からはじまり、そこから発展した。異年齢児保育しか知らない。保護者がどの園にするかを決められる。園によってコンセプトがある。職員が考えて決めるがコンセプトには音楽を重視しているとか、私の園では日本人がいるので日本の文化を教えることができるとか、園によって特色が出せることから、保護者がコンセプトを見てうちの子は音楽が苦手だから合わないな、とかで決める。それがドイツの特徴。登園時間、降園時間も選べる。コアタイムと言うものがあるがコアタイムを入れて何時間でもいい。うちの園では 9 時～13 時までがコアタイムなので、7 時～13 時でもいいし、8 時～17 時でもいいし親が選べる。曜日によっての違いも認められている。

—3.行政の理念と施策—

行政の施策として日本で幼保一体化が騒がれている時に、一足先にドイツは動き出していた。管理の面での幼保一体化が進んだ。今勤務しているのがスポーツ陶冶局。これまでは保育園が福祉局。幼稚園と複合施設は学校局が管理していたがそれが合併され、学校局に吸収され名前を変え、教育スポーツ局に管轄することになった。あとは変わっているのはオープン園が増えていて、背景としては多様化する難民が増え、親から要望が多様化した。多様化に対応するためと社会の変化、シングルマザーや共働き家庭が増え、その受け皿を受けないといけない。リジリエンスをつけないといけない。そういうことからオープン園が理想ではないかと、教育スポーツ局が開かれるようになった。

「全ての人に陶冶を」と言うことでミュンヘン市における陶冶のモットーとして「公平で、将来性のある、大都市に適した、世界に開かれた陶冶」がある。保育料についてだが、公立が例えば、幼稚園 7 時間 140 ユーロ。2 万円弱。最高の場合 10 時間保育で 2 万 5000 円くらい。保育園は 10 時間くらいで 4～5 万くらい。所得によって分かれていて日本より細かく 12、3 段階に分かれ、一番少ないのが 0 円。ミュンヘンでは 1/3 が 0 円。それだけ市がバックアップしてくれている。2009 年～2014 年まで国を挙げて陶冶政策を行った。先ほど 90%幼稚園と言ったが入っていないのは難民やアラブの子が多い。本当はそういう子こそ来てほしいのだが親が困り込んで、小学校までは家庭で育てる、という傾向が多く、どう改善していくかが教育スポーツ局の課題。社会の流れによってシングル家庭、移民家庭なども増えてきている。日本も同じような状況ではないかと思う。そんな中で全ての子どもたちに良い養育と育成がなされなければならない。質と多様性、保育プログラムと言うのは設定保育、先生がどういう設定保育をするかを考えないといけない点として、①子どもや家族の要望（ドイツ語ができない子どもたちはドイツ語支援をしてほしいとか、ドイツ語を使った遊びをしてほしいということ）②与えられた環境（植物園があったら恵まれた環境の中でどう環境に取り入れられるか）③新しい学術的な知見（うつぶせ寝、あおむけとどっちがいいかはその時によっていいか違う。オープン園がいいという学術的な知

見があるが、子どもにとっていいことは何かと模索している)④保育者の得意とすることは何か(音楽が苦手な人に音楽をしなさいと言うのは違う。その人の得意とすることを保育プログラムに反映していくこと)を考慮する点として挙げられている。これは多様性の一例。日本にも男性保育士さんが増えてきていると思うが、ドイツでも何パーセントか。学童には一園には一人入るが幼稚園になると少ない。1 割弱の男性保育士さん。理由としては薄給ということ。保育者は女性の仕事と言う考え方があり、増えないのかなと思う。これはイスラムの保育者。イスラムの保育者も何人かいる。被っていない人もいるがお面をかぶっている人もいる。

—4.オープン園の増加—

もう一つとしては統合教育を推進しています。統合教育はオープン園の考え方のもとなり、1970 年代にインクルージョンを進めた人は障がいの人を特別な学校に行かせるのはよくないという人たちで、子どもたちに体を動かすことを推進しましょうと言う人と、運動推進派の人たちが手を結んで統合教育を推進してきた。園の中に養護保育士を加配する、外国人の多い園に対してドイツ語相談保育者や異文化理解保育者を加配している。以前は軒並み 80%を超えるところに相談員がいたが、今はイレギュラーで 50 パーセントくらいのところにもいたりする。その例としてミュンヘン北部の低所得者地域で保護者会の定期的な開催とか、保育時間内に行っている。7 時～11 時くらいを開放して、来たい人が来てコーヒーを飲んだりする。保護者のドイツ語が上達していないなと思ったら一緒に支援をしたり、子どもと保護者が一緒に遠足へ行ったり、日本ではよくあると思うがドイツでは珍しいこと。全ての子どもたちがともに遊び学ぶ中において、自分の意見を反映することができることを重視している。これは参画のことで、子どもたちは全部自分で決め、遊びの中に反映することが大事だといわれている。統合教育の例だが、ミュンヘンの下町ギージング。0～12 歳まで地域に開かれたもの。プロテスタント系家族支援団体と協力して、家庭支援の団体と行ったりしてふれあい広場を設けている。子どもたちがそれぞれの欲求を受け止めてもらえ、適切な遊びや指導の中で発達を支援されグループの一員として育っていくこと。一人の子に適切な指導が他の子には適していないこともあるので、そこで子どもをよく見るところに意味があるのかなと思う。保育者を支える職員として常勤として養護保育士や倫理カウンセラー、非常勤で言語療法士、動作療法士、学校の先生、ヨガの先生と連携を取ったりしている。ミュンヘンでもう一つ力を入れていることとして、自立性を重視した学びがある。

—5.自立性を重視した学び—

レッジョがミュンヘンで話題を呼んでいるが日本の取り入れ方とちょっと違う。地域を含んで子どもを育てることに着目した。街をあけて街の教育に関わる。街にいる子どもたちの教育を街全体で教育に関わっていく。これができるのがレッジョではないかと言われている。これが地域に開かれた保育園につながっている。2 年前に行った園で、ウェルカム幼児施設という園で、70 人くらいのうちの 12 席を 3 か月以内に変わる席として確保している。つまり難民など必要な人がいなければ空いている。急ぎよ必要と言う人のためにウェルカム幼児施設と言うのがある。慣らし保育やお別れ保育について敏感になっている。街中へのお散歩保育、カルチャープロジェクトなどでミュンヘンに親近感を持たせている。最近取り上げられているのが幼児施設においての参画とデモクラシー。どうして言われてきたかと言うと、子どもにも決める権利がある。それは国連で採択された子どもの権利条約がある。保育者は参画の基本姿勢として、子どもを貢献できる一人の人間として尊重する。これはうちの園では 3 歳から尊重している。例えば、お祭りのテーマを決める時、保育者が

決めるのではなく、子どもたちと決める。日常生活の中でどんなテーマがいい？と聞いておいて、この前はカーニバルで、「メルヘン、怪獣たちのいるところ、海の生物がいるところ、アナ雪」がいいかを、お集りのときにそれぞれにシールを配り、絵で表しているのでどれがいいかをシールで貼らせ、多数決で多いものに決まった。メルヘンになり、その中からさらに5つのメルヘンの中から決めた。大人と子どもは同じ目線での対話を行う。これしなさい、とかではなく同じ目線で対話をすることを心掛けている。子どもたちがアクティブ、能動的に動いて自分で決めて行動することで力をつけていくことが参画のいいところかなと思う。うちの園の積み木のコーナーだが、写真を見てわかるように南アフリカの子もいるし、真ん中の子は黒に近いグレーゾーンの子で、うちの園でインクルージョンになるように行っている。日本と同じでグレーゾーンの子が増え、子どもたちにとってインクルージョンの園にした方が過ごしやすいのではないかとされている。うちの園は幼稚園児が50名、学童が100名の園。1年前に藤森先生たちに見学に来てもらった時、幼稚園はオープンになっていたが、まだ学童がオープンになっていなかった。全体的に機能し始めていて、うちの園でオープンにしようと思ったのが3年くらい前。うちの園もオープンにした方が心地よい園になるからと職員研修が始まった。一番大事にしたのが保育観の共有からはじまり、職員みんながオープン園についていいイメージを持てるようにした。職員の中でも「オープン園になったら、子どもの動きを把握できないのではないかと」、とか、よくないのではと言う人が多かった。「子どもの発達にもよくないのではないかと」、静かな子は何もしないで過ごすのではないかと議論を交わした。どうしても合わない先生は別の園に転園した。オープン園になり、廊下は以前は何も使わず、遊びの場としていなかったのを、積み木のコーナーとゆっくりするスペースにし、いすを置いて過ごせるコーナーにした。今まで2つのクラスが遊ぶのが園庭だけだったのが、園の中でも行き来できるようになった。

次は保育者の異動。私はこれまで1クラスにいたがそれをやめて、毎週変わり今週は1のクラス。翌週はビストロと言って食事、翌週は2のクラスと職員の移動をするようにした。すると学童の子も見るのでそこが変わってきた。その後に決まったのが子どもの行き来。子どもがどこで遊んでもいいようにするという段階を踏んで、藤森先生たちに見学に来てもらったのが去年の7月。あれから1年が経ち学童もオープンになり、学童の子も保育園で遊ぶこともあるし、保育園の子が学童に行くこともあり、でも最初はカオスだった。未だに反対する職員もいるが、意外といいなと私は思っている。最初はよくないと私も思っていたが、子どもの行き来が変わり、意外といいのかなと思えるようになったところ。子どもにとって心地いいは、職員にとっての心地いいとは違う。職員が不安に思ったのは、子どもがどこで何をしているか分からないという不安。実は職員の不安であって、子どもは気にしていない。発達には関係ない。職員側の満足度で、子どもを見ている、把握しているのかなと思い始めた。それまでは、「いいのかな、これで？」と思っていたが、子どもが生き生きして、一番変わったのが、心配していたのが静かな主張できない子が、みんなに潰されるのではと思っていた子たちが生き生きして、子どもが関わりたい保育者と関われ、やりたいことを決められるのは保育者にも能力がいるが、背景を抑えておかないと流れてしまうところもあると思うが、しっかり押さえておくオープンな方式はいいのではないかと思っている。保育者はいい仕事、他の仕事は破壊する仕事であったりする現在で、子どもを育てていく仕事はとても幸せな職業だと思っている。ドイツと日本と違っても目指すところは同じだと思うので一緒に前を進んでいきましょう。ご清聴ありがとうございました。

以上、2017年8月27日に行われたドイツ×日本「保育研修」の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)

講師プロフィール：BERGER 有希子氏

香川県出身。お茶の水女子大学卒。結婚を機に渡独。1991年ハール市ファミリーセンター（育児支援施設）にてスタッフとして勤務。2003年よりミュンヘン市教育スポーツ局所属。公立幼稚園にて1級保育者として勤務するとともに、日本をはじめアジア方面の視察案内を担当。二男一女の母。

Ich will

わたしは希望する あなたがわたしの話を聞いてくれることを… 何の判定をすることなく。	わたしは希望する あなたがわたしを勇気付けてくれることを… 強制することなく。
わたしは希望する あなたがあなたの意見を言うことを… わたしに忠告することなく。	わたしは希望する あなたがわたしを見守ってくれることを… 捕まえておくことなく。
わたしは希望する あなたがわたしを信頼することを… 何の期待をすることなく。	わたしは希望する あなたがわたしを守ってくれることを… 心の底から
わたしは希望する あなたがわたしを手伝ってくれることを… 何の判断を下すこともなく。	わたしは希望する あなたがわたしに近づくことを… 侵入者としてではなく。
わたしは希望する あなたがわたしの世話をしてくれることを… 圧力をかけることなく。	わたしは希望する あなたがすべてを知っていることを… あなたが気に入らないわたしのいろんな点について
わたしは希望する あなたがわたしを見てくれることを… わたしの中にあなた自身を見ることなく。	わたしは希望する あなたがすべてを受け入れることを… 変えようとせずに
わたしは希望する あなたがわたしを抱きしめてくれることを… 窒息させることなく。	わたしは希望する あなたが知っていることを… 今日わたしを信頼することができるということを。 何の条件も無しで

ドイツの詩 作者不明（訳：ベルガー有希子氏）